

情報金庫の意義について：情動的正義の立場から

サトウタツヤ

(文学部教授・研究部長・衣笠総合研究機構長)

情報金庫の意義についてお話しします。理論家は普通のことの2倍、極端なことをいうべきだということを掲げていますので、わかりやすくなるように極端に話していきたいと思います。「情動的正義」ということは「道徳と倫理と正義を、きっちり分けて考えるべきだ」という立場に立っています。道徳というのはしつけですよ。倫理は悩むもの、正義は断じるもの。倫理はめんどくさい。悩んでばかりで。倫理は悩むことなんです。そうじゃなくて、正義によって断じようということです。断じるためには基準が必要で「正義」の反対は「悪」ではなくて「正義」の反対は「もう一個の正義」。正義は争いを起こすわけです。宗教戦争がいい例で、互いに悪いことをしていると思ってなくて、正義は争いを引き起こすという側面はありますが、個人的に今は、正義でいこうというフェーズに入っています。

情動的正義の基本。「情報は公開されなければならない」。ここに尽きるわけです。法と心理をやっていることもあって、隠すのはだめだ、公開されないものはだめだ、わかりにくいものはだめだと。裁判員裁判はなんで公開するんだという話がでたりしますが、刑事裁判を秘密でやったら大変だという話であります。情報は公開されるべきであって、「公開」の前には当然、「保存」がある。保存がないところに公開はない。第二次大戦後の日本というのは、情報を焼却した。その結果、戦前、戦中の意思決定プロセスがほとんどわからない。アメリカには公文書館があって、50年たったら公開されているので、ワシントンで毎日情報が公開されている。日本のジャーリストはそこにいっているわけです。今日、出た情報を読んで、こんなのがあったという先陣争いをするということを日本のジャーナリストがアメリカでやっている。それでいいのか、いいわけがない。フェアと正義は違いますが、アメリカがフェアである理由はないわけで、自国によい情報であっても悪い情報であっても、自分で持っていることがなければ、他人にコントロールされてしまうわけですので「保存」が大事と

いうことですね。

そして、個人に不利益な情報であっても、一定の年数がたてば公開されるべきだと。個人に不利益な情報を共有することが個人を支える仕組みをつくるべきであるということになるわけです。臨床心理士が学校に入って話を聞くと「これは秘密だから」と他の先生たちとの間で情報を共有しない。それならスクールカウンセラーがいてもしょうがないじゃないかということになっていく。情報をもって、隠すということは正義に叶うことではないんだと。あるいはバレたって、それを支える仕組みを作るのが大事です。そういうことを推し進めていくべきだと。正義論ですから、他の正義とぶつかってもそれを乗り越えていくという考え方になるわけです。情動的な正義というのは、今までになかったわけでもなく、手続き的正义の下位分類の中にあっただけですね。労働者と使用者が、誰かをクビにするとか、しないと、こういう中で使用者の方が情報をたくさん持っている。たくさん持っている人が、情報が少ない労働者と交渉をしていいのか。そういう概念でしかなかったものを、我々が展開していこうということですよ。

我々の考え方は「保存され公開される」ということに尽きます。公開は正義ですから、そのためには必ず保存されなければいけない。保存するという概念こそ重要なのです。アーカイブはデジタル化される書庫みたいな感じで、近年の考え方であるといわれますが、もともとは「アルケイヤ」という言葉、統治の記録という意味をもってるわけで、1789年、フランス国立公文書館が、現存する国家統治の文書館としては一番古いものだといわれています。もちろんこれには問題があって、個人の出生記録から文房具の調達まで、あらゆる記録を残すのかという議論はあるんだけど、国のガバナンスの点からいえば、やっておくべきだということになります。やっと日本でもできてきた考えで、いろんな法律がやっと整備された段階です。

公文書は公になるんだけど、公でないものも残すべきだという考えもある。アメリカにおけるアーカイブがそうです。アメリカはどういう国かと考えると、歴史のない国だということで、皆、捨てないんですね。土地も広い。残すことによって歴史資料を「造」る、僕からいわせればコンプレックスだと思うんだけどとにかくあらゆるものを残そうとしています。組織の記録を残すという意味でのアーカイブは、統治というと国家統治をメインに考えるんだけど、個人のガバナンスになると個人記録も残そうということになる。たとえば

日記なんかは、そうなんです。日記をどう保存するかは面白いです。

精神分析学者・フロイトの愛人という人がいるんですが、この人は数年前に亡くなって、ある民間のアーカイブに「死後99年に公開しろ」といって寄贈したということがありました。日記は生々しいもので、今生きている人のお父さんとか、今生きている人のおじいちゃんがこんなことをやっていたという話になりますから、いくらなんだって影響が大きすぎる。いくら公開が原則とはいえ、それでは影響が大きすぎるということで、一定の保存が必要になる。それはトラスト、信託という考え方につながるわけで、信頼できる機関があるからそれができるといわけです。

私が博士論文を書いた時、元良勇次郎という人の記録をアメリカのジョン・ホプキンス大学まで行って調べたんですが、その人が学長に書いた手紙が残っている。元良勇次郎という人が有名だから残っているわけじゃない。学長宛の手紙が残っていて学長宛の手紙がタグづけされていて、元良勇次郎とパッパッと拾ってきて全部出してくれる。1889年に書いた直筆の手紙が出てくる。私はそういうシステムに対する憧れがある。保管と保存をした上で、未来の公開に備えるということです。

ここで著作権という問題が出てくるわけですが、私は「コピーレフト」論者です。「コピーライト」は著作権を守る。権利、ライト。コピーする複写権のこと。それに対してコピーレフト。リーフの過去形にレフト。離れる。コピーライトに対してコピーレフトの運動をしている人たちがいるわけです。基本的にはコピーレフト論者であることもあって、現行では思想を表した文章は死後50年は、その人もしくは遺族がもつということになっていて、それには従うべきだとは思う。一応、法治国家ですので。それを過ぎたら支払う必要はないだろうと。公開されるのが正義だとイメージを持とう！ということです。

情報金庫は望月昭先生さんと話している中で、内容自体は望月先生がおっしゃった通りです。今回だけでなく今後につながるようなものを仕掛けておかないといけないだろうと。戦略的事業も3代目だから同じことではつらいかなということであって、この発想が化けるか、化けないはともかく、とにかくやろうということで、情報金庫という概念を唱えたわけですが、個人の生きる証を保持するわけで、それを民間機関が保持する。個人が自分でハンドルできる情報を民間組織が、私立大学が保持する仕組みをつくれないう発想が根本にあります。

もう一つは、生きる証に関していうと、心理学者ではありますが、反能力主義的なニュアンスもあります。能力というのは「できる」ということであって「できる」ことは人と環境との相互作用そのものです。これがシステム学的に言えばオープンシステムとなる、開放系となるわけですが、開放系というのは、いってみれば、システム論の重要な考え方で、光合成、葉っぱだけみていると外界から全く途絶して、スタティックに見えるわけだけど、太陽と二酸化炭素をとりいれて酸素と水を出している。そこにはダイナミックな作用が現にある。人間もオープンなシステムで、先生が「袋豆詰めしかできない」と思っちゃえば袋豆詰めだけをできる人になる。もっと「時間管理だってできます」と思って支援すれば、そうになっていく。その総体が能力なんだと。その能力の条件も含めてその人なんだということで、それを全て情報として扱いたいのです。もちろん、悪い方に発揮する能力もあって、一人にしておくと金を盗んじゃうという人もいるわけです。悪いやつだから盗むという話ではなく、こういう条件だとお金を盗んでアイスクリームを買いに行くということなら、そうしないように仕組みを作っていけば良いのではないのでしょうか。そういう条件や仕組みを情報としてもっているということがあっていいのではないかということです。そうすると今現在の個人がハンドルする情報としても使えるし、将来、100年先、1000年先にも個人が生きた証が残っていく。大学というのは永続する機関ですから1000年後のことを見通してやるべきだ。研究部のモットーは、22世紀にトップ大学になるという、今だと東大と立命の差は30年くらい、設立された年に差があるけど、あと1000年もたてば誤差になります。長い目で考える。そういうことが大事だといっています。

危険なことはしないというのが情報倫理の考え方だけど、リスクをとるのが情報正義の立場であると。ならず者がいると所長は大変だろうけど、二倍、極端に話しておりますので、普段、考えていることは、それほど過激ではございません、と最後につけ加えておきます。

〈質疑応答〉

望月 普段はもう少し倫理的なの？

佐藤 普段は「倫理」で考えますよ。

松田 あえて極論をいうというところで考えているということですが、情動的

正義の話になるとプライバシーはどうなるわけでしょうか。

佐藤 プライバシーは現行法で保護される範囲において保護されるべきだと。

松田 原則、公開だけど、必要がある場合は保護されるということですか。

佐藤 そうです。公開することを前提に考えるということです。すべてのことを知っても、皆が仲良く生きていける世の中があるべきだと。

望月 それは理想ね。オープンシステムでいえば、情報を出すの、隠すのということでは、なぜそれを隠さないと不利だったかという、システムの問題だから、情報をオープンにしても大丈夫になるべきというのは「他律的自律」に似ているんだよね。

佐藤 そうそう。

望月 今まで自立っていうと、一人で何とかするという、独立とか。なるほど。

佐藤 ほんとはいろんな情報を知ってたって、それを差異として認めて仲良くやっていけるというのが理想です。

望月 背番号制とかは誰がハンドルするかということが問題になります。

佐藤 官がやるのはよくないかもしれませんね。

松田 この正義はアイディアとしてはわからなくもないですが、「ここだけの話」はできないことになるのではないのでしょうか。

佐藤 「ここだけの話」で共有してもいいとは思いますが。「ここだけの話」は「上げてくれ」ということでしょうか。個人同士では、それはやってもいいと思う。しかし、そのことが保存されて将来公開されてもよいのです。

松田 基本的には公情報ということ？

佐藤 私人の生き方は公のものということですね。官ではないですよ。人間は人の間（あいだ）と書くし。

松田 公私の境界はあるけれども、だけど、情報は秘匿すべきであるということではないのが基本となるということですか？

佐藤 「個人がハンドルすべきだ」というところが前提としてあります。

望月 ここまではプライバシーということではなく、当事者がハンドルする、ここまではトラストして権利があるということだったら、プライバシーは保護されると思う。本人の好きな情報をあげるわけだから。

佐藤 プライバシーの方を情動的正義の下位概念として位置付けていることは間違いない。僕自身はね。

望月 公開が前提で、次にプライバシーがあるかもしれないくらいの段階の話

と、個人がハンドルすることと、ちょっと次元が違う話じゃない？ 個人がハンドルするのは必要で、他人情報が問題になって、プライバシーの問題が出てくる。

佐藤 年齢にもよります。未成年の問題。子どものことなどは不利益な情報だからといってあえて隠す必要があるのかといえば、そうともいえないだろうと思う。もちろん、何年も不利益な情報につきまともわれても嫌になるけど。

望月 そこはぶつかるところだろうと思う。

佐藤 そうそう。性犯罪者の話なんかはそうだよ。過去にもやっているか、やっていないか。イギリスではタグづけをしている、現実には。

望月 スリーアウトで、ここから先は絶対ついて回るというのをしていれば。よくわからない話は、ちょっとひっかかるところがあるんだよね。必要なサービスを十分提供していったら、それをつなぐ、最初の正義のある状況をつくっておけばいいんだけど。

佐藤 ただ共有するだけではしょうがないわけで。

望月 そこになかなか本人が、カミングアウトの問題で。

佐藤 そうそう、カミングアウトの問題からいうと、この情報をカミングアウトする。不本意入学で立命にきちゃったみたいなの、そういう人たちの話をした時に「実は私、ここに落ちて悔しかったんです」といえる状況がないと、不本意入学者は不本意入学者であることをやめられない。状況をつくることの方が大事なんだというのは、全くその通りで、悔しさとか、ちゃんといえないと次に進んでいけないんだという話があって、それと同じで、不利益であっても、恥ずかしかっても、悔しかっても、言えるという状況をつくって初めて成り立つというのが、全くその通りだと思う。

望月 それはもっと先の話だということになっちゃうでしょう。

佐藤 理想を語らないと！ 理想と正義です。心理学者。

松田 情報という言葉が、ものすごく幅広い内容を含みますので、どう扱ったらいいかわからないところがありますが。

土田 情報金庫のことを考えて、アーカイブということで預けるというイメージが強かったんですが、結局、話を聴いていますと、自分がハンドルするところの重要性。素人考えでいくとアーカイブは預けちゃうというイメージがあったんですけど、自分がハンドルするのはどういうことをいうんですか？

佐藤 信託する範囲を自分が決められる。

土田 範囲を決める？

佐藤 死んじゃう人はわかんないんだけど、何年か公開を決められるんだから、それと同じように、未成年者の話がかかると、誰が信託するのかという面倒くさい問題がある。

望月 子どもの問題がついて回るんだ。立岩さんもいっているけど。僕がいうのは自分が生きているうちに自分の情報をうまく使うために。1000年後は知らないけど。

佐藤 1000年後に人が生きた証を残したいという想いも、個人的にはあります。

望月 ミクロな歴史を、ちゃんと個人の歴史も残っているというのは。

佐藤 それがあって初めて1000年後もあるわけだから。

望月 自分でハンドルということは、1000年後の話をしているのではなく、自分の情報を自分で使いながらキャリアオンしていくという。

佐藤 自分をよく知ってもらって、よりよく生きるために「この情報を使ってください」というのが望月さんのアイディアだね。「これならできるとですよ」と。「こういうふうにはできないことがあり、できることがある。これを見てください。そしたら新しいステージでも似たようなことができるはずだろう」と。

望月 しかも「できる」方向は表現されていることが前提で、今までの医者診断のような感じではなく、物語をつくっていく。援助設定でも「できないこと」でも、うまく知恵を集めて展開できる、知恵としての情報。本人や直接の関係者はなかなか考えられないから、そういうプロが必要なんじゃないかと。

佐藤 差別って何かというと、本人の情報ではなく、本人が属しているカテゴリーによって、その人の性質を決めるということですね。カテゴリーを知った瞬間に「こいつはこうだ」というのが差別そのものだから、それは、なくす。社会を変えながら、不利な情報であっても公開できるようになるように。

佐藤 地道にやっていく。1000年先を見据えてやっていきたいのです。